

● 『もののけ姫』 宮崎駿

日曜日に、家族全員で、映画を観に行った。

桃子なんか、生まれて初めての映画館。

いく前に洸太郎は、兄ちゃん顔で、真っ暗な大きい部屋で、大きなテレビを見るんだ、と教えていた。

とうの洸太郎は、初めての映画館の時、すでに暗くなっていた時に入ったことと、画面のゴジラに度肝を抜かし、たたまれたイスが分らず、イスとイスの間にヘナヘナと座り込んでしまったのであった。

桃子は顔をこわばらせながら、怖いけど、皆んなで手をつないでみるから大丈夫と答えていた。だけど、ちょっぴり不安で、並ぶ順番を一生懸命考えている。

「お父さんの横に洸太郎、そしてお母さん、それから桃ちゃん……。洸太郎の横にお父さん、桃ちゃんは小さいからお母さんとお父さんと手をつなぐから、え〜と…。」

帰ってきて、晩ゴハンのうどんを食べながらやれあそこが怖かったとか、あそこはすごかったとか、タタラって何とかワイワイ話をした。

「お父さんのこと、今日からアシタカと呼んで！なんかそっくりだっただろう。わが名はアシタカ。村の子どもよ、心静めてうどんを食べよ！！」

「やれやれ…。お父さんって本当に…。でも又行こうね。」

「承知！！」

まだ、アシタカになり切っているお父さんであった。

● 『文藝百物語』 菊池秀行他 ぶんか社

今年もお盆には実家に帰った。

昨年、友人の親・祖母が相次いで亡くなり、三軒もの初盆を迎えることを考えると例年とは違う盆の帰省とも言えた。

その晩、用事を出かけていた母を迎えに、子供達は父と一緒に外出していた。家内は、友人宅の初盆に、子供を従れてゆくと大変だと言って一人でおまいりに行った。

日頃は、ふすまを開け放つと、涼しい風がよく通って、寒く感じては、閉めたりもする居間で、一人寝ころがり、本を読んでいた。

その晩はなぜか、パタリと風が止んでいて、白いふすまは両側に開かれたままだった。

その先には、部屋から漏れる光をも吸い込む暗闇があった。

字面に目を落としていると、視野の中のふすまとふすまの間をスーと何か白いものが横ぎった。

確かに、夜の様なやわらかさを持った白い影が、左から右へとゆっくりと渡っていった。

「何？」と判断することなく、その光景を、時間が止った中で見ていた。

それがお盆に帰ってきた霊なんおか、目の錯覚なのか知らないが、幽霊らしきものを見た初めての夜となった。

怪談ものが、百話集められたこの本は、読まない方がいい。

● 『水辺のゆりかご』柳美里 角川書店

著者の作品は、何となく気になって読み続けている。

正直言って作家としてまだまだだと思うし、ダメだなと言われればそうだなと思ってしまうが、妙にひかれるところがある。

彼女の語る自分史には、頻繁に記憶を失っている箇所が出てくる。本当だったら忘れようもない程重要な場面が、すっぽりと抜け落ちている。そんなはず無いよ、それは異常な精神状況における、自己防衛じゃないかと勘繰ってしまう程記憶を失っている。

しかし、考えてみると、自分の重要な場面での記憶、事実だっただろうか？

自分でそう思って少しずつ印象的な場面を紡ぎ出したんじゃないか。

あのとき、うるさく感じてたセミの鳴き声は本当だろうか。俯くあの子の首筋にうっすらと浮かぶ汗にひどくドキドキした印象は？

人は自分のことや過去のことを思い出してそれを事実と確信しているが、そこには必ず虚構の“自分の物語”を作っている。正直にと意識しても無意識層で自分に納得のいく完結性をつくっているものだ。

それを本当の自分史として人は生きてゆくんだ。

自分の確認は、その記憶の連続性に負っているから。

重要な場面、彼女は重要な分だけ欠落させる。そして細部を淡々と細部の記憶として積み上げてゆく。決定的な物語の核は空虚な穴にしたまま語ることによって、反転した自己認識を行っている。想像以上の状況に、特異な感

性が育ってゆくなら話は簡単だ。

それは僕らにとって、別の人の話だから。

本書は、想像以上の状況に、僕らと同じ感性・感情の一少女が向き合っ
てゆく。これは たまらない。

そこにあるのは、紛れもなく僕らの物語だからだ。

- 『子どもを殺す子どもたち』デービット・J・スミス 翔泳社 (9月 No.3)
1993年2月、イギリスで2歳の幼児が行方不明になり、後日変死体で発
見された。

容疑者として、10歳になる2人の少年が逮捕された。

本書は、ジェームズ・バルガー事件についてのノンフィクションです。40
0ページを超す分量を、考えうる限り、事実で埋め、微に入り細に入り調べ
つくし、事件当日を再現し裁判を記録した。多分、おこったこと、あったこ
とは、最大に表現されている。

しかし「なぜ」という最初の疑問は、さっぱり分からない。

日本でも、神戸での事件、多数のいじめ事件、幼児・女子中・高生殺人事件
等、10年前とは、なんとなく印象の違う、どこゾツとする様な事件が、相
次いでいる。

膨大な情報が流され、限りなく再現かを試み、解釈しようとする。

しかし、「なぜ」という最初の疑問は、さっぱり分からない。

多分、僕らが持っているこのアプローチの仕方は、完全に的が外れているの
だ。

事件に対する僕らの想像力は全然届いていない。

それは、きっと事件の根底が、想像力を発する以前にあるからだ。あなたと、
私の根底にすでに横たわっていて、疑問以前にそいつは、そこにいる。

- 『九龍城』可子弘明監修 岩波書店

「魔窟」の代名詞に称せられていた九龍城。

迷い込んで、そのまま行方不明になった人数知れず。

光届かぬ闇に人知及ばぬ無法地帯。

おどろおどろしいイメージで掲揚され続けていた九龍城。

その九龍城の完全図解が本で出ると聞き、書店に寄るたびに「九龍城」「ク

一ロンジョウ」と聞いて回っていた。「クーロン」は和製で、正しくは「きゅうりゅう」又は「カオル」「ガウロン」等らしい。）

九龍城とは実は、約2.6ヘクタールの面積に、10～15階建てのペンシルビルが300～500棟ぐらい密集した集合体なんです。

そして、その中になんと5万人もの人々が生活していたという。

900軒以上の工場・食堂・店舗・学校等があり、衛生管理法が及ばないため、香港のすり身団子の90%が城内で生産されていた。

医者・歯科医は150名以上が城内にいて、無資格者も多かった。当然ながら手術等も安く、需要が多かったらしい。

なんと・・・。

とにかく、見開きの細密画、写真を見て下さい。すごいです。理由もなく嬉しくなってニタニタと薄笑いを浮かべながらなめる様に見てしまいました。自然と増殖し続けた九龍城を見ていると、有機体としての共感が、奥底から湧いてきます。

● 『科学がきらわれる理由』 ロビン・ダンバー 青土社

ある人から「徳さんの考えを聞くと、なんとなく分かるんだけど、具体的にどう考えたらいいか分からない。」と問われた。

この様な意見・質問は、大歓迎である。一方通行的な回路は、送る方も送られる方もあきてきて、動脈硬化による臨終となるのがおちである。「徳さんの感想文」を「徳さんたちの感想文」にするべく、参加を強く希望します。少し彼からの問いかけを考えてみたいと思います。

確かに、僕は執拗に、今迄の自分達の考え方が、時代や言語などにつくられ、制限されたものであるかということを書いてきました。じゃあ、どんな思考方法がありえるのかという問いは当然です。

しかし、その前に考えて欲しいのは、自分の考えとは何かということ、それは自分の考え方の外部に出ることです。

きのうや今日、ポッと与えられたものじゃなく、生まれてこのかた数十年自然に築き上げてきた考え方の外に出るとは、どういうことでしょうか。それは、全く違う考え方を思い付くことではないのです。

まずは、自然に考える自分の“考え方”に気付くことだと思います。

自分の目では、自分の目を見ることは出来ません。しかし鏡に写せば、目が

見えます。これは、外部に出た自分の目を見ているとも言えるし、鏡の視点で、自分の目を見ているとも言えます。いずれにしても目の外部に出て、初めて目を見ることが出来るのです。不定形でもある“考え方”を見るのは容易ではありません。しかし、様々な場面、角度から“考え方”を見つめ直し、気付き続けるしか方法は無いです。

そうやって、少しずつ獲得した視界から見る僕らの世界は、どんな彩りの世界なのでしょう。全くの別世界なのだろうか。

新しい考えは、古い考えの変質でしかないのです。

常に出征する場所は、古い温床以外ないのです。

僕らは、或る日突然、解脱して、全く違う思考パターンを獲得することなんかありません。

イジイジ・ウジウジ考えたり、泣いたりしながら、昨日の自分の姿を見て、少しずつ少しずつ今日の自分を納得してゆくんです。

僕らの知識は、西洋の知に大きく依存しています。その西洋の知が体現したのが科学です。人類は、もはやこの科学を否定しては生きてゆくことが出来ません。

僕が複雑系のことを言い続けるのは、この科学の思考方法に気付き、その外部に出るためです。そして、尚且、科学の本を読むのは、安易に全く違う思考方法に逃げない為です。

神秘主義や精神世界の^{ある部分}は、今後科学的にも納得に足る領域となつてゆくでしょう。もちろん^{ある部分}は科学では証明できない領域となるやかも知れません。

しかし現段階では、それら全てをひっくるめて、新世界を語るには疑問です。あたりまえの思考回路をどこか停止してしか描けない世界は信用しません。古い考えを引きずってしか明日の考えを生きれないから。

本書は、近年批判的に言われる科学者からの反論です。

人間は、常に観察して認識する。それが考える基本であると論じます。科学は、結果としては多くの間違いを生むが、方法は、人間の思考の理にかなっていると強調しています。

“考え方”の外部で観察し、“考え方”を考える。

全く、科学的です。

● 『アナル・バロック』 秋田昌美 青弓社

学生の時、一つの問いが投げかけられ、その問いの前に、ただ口をあぐりと開けたまま、立ち尽くしたことがあった。

「夕焼けが美しいとは、どういうことか？」

自明の様に感じたり判断していることは、意外と多い。

勿論、常識とは、人類が営々と築いた知の集積であり、知恵であろうことは、ぼんやりとは分かる。しかし、しかしである。

性に関することや排泄物に関することのタブーもその1つだ。性行為が、やはり獣的な行為であったり、排泄物が、衛生的に汚いものであることなど、常識として納得してはいる。

しかし・・・。

もう一度問おう。性とは何なのか。性の持つタブーはなぜ。排泄物への嫌悪感は、どこからくるのか。

本書は、性の風俗書である。

この手の本は、結構気になって読むのだが、いつもハーというため息にも似た読了感を味わってしまう。

その中には、いつも人間の持つ想像力の豊かさが満ちていて、生物としての奥深さを感じずには、いられない。

それに比べ、自分のことを考えると、なんともお粗末など、心の底から思ってしまう。このまま打ちのめされては、たまらないと虚勢を張って初めての問いをつぶやく「性とは・・・・・・。」

しかし、よけいに空しくなってしまうぼくである。

● 『現代思想の冒険者たち 27 ハーバーマス コミュニケーション行為』

中岡成文 講談社（9月 No.5）

最近、話題になる事件は、暗く、形容し難い嫌な気分になるものばかりで、気が滅入ってしまう。表現できない嫌悪を表現しようと多くの人が躍起になって論述するが、ことごとくなにか得心しない。

この嫌悪は、語りつくせぬが、語らずにおれない不安を栄養に増殖し続けている。幼い児を取り巻く状況は「知らない人に従ってゆくな。」ではなく「知っている人に気を許すな。」となり、思春期にある子ども達には「いじめ」という他者不信を植えつけてゆく。

人間は、もう他者との関係性を持ちえなくなったのか。

ハーバーマスは、コミュニケーションを人間を考える上での根幹にすえ、しかも未来への希望を託す。

コミュニケーションが疑念に晒されている今こそハーバーマスを僕らは再考しなければならないのかもしれない。

他人とのコミュニケーションを奪われ、ガタガタになってしまった僕らは、正に彼の言う“間主観的存在”なのだと痛感する。

主観や意識を中心に考えてきた哲学は「私」という主体をひたすら考えてきた。しかし、僕らは単独に生きているわけではない。常に他者や世界の中に在るのだ。自分の内的世界と社会（システム、他者等）は、緊密な影響関係にあって、その時、その場で生成されている。

つまり、主観と主観の間としか言いようがない存在なのだ。

言葉を変えると、人間は常にコミュニケーションするものを指すのだ。

ハーバーマスの様に、コミュニケーションの方向性（討議→同意）や可能性を僕らは単純に信用出来なくなってしまっているが、新しいコミュニケーションのあり方を模索せざるを得ない崖っぷちに立たされていることは確かだ。

● 『現代思想の冒険者たち 18 メルロ＝ポンティ 可逆性』 鷺田清一 講談社

精神と物質、内部と外部、等、伝統的二元論から西洋哲学が抜け出るために、多くの哲学者が思考をひっくり返し続けた。そして、ついに、その試みは現代思想へとまたぎ越すこととなった。メルロ＝ポンティによって。

彼は、幻影肢を例に上げる。事故や戦争によって失った手足が痛んだりする症例である。

もはや存在しない箇所が痛いとは、どういうことだろう。

いわゆる幻想なのだろうか。しかし、ある求心性神経を切断すると、その痛みが消える。その意味では、生理学的である。

ある日突然、負傷時の状況を思い出した時、幻影肢が発生することもあるし、患者自身が、切断の事実を認めることで、なくなることもある。これは全く心理学的である。

つまり、具体的存在である僕らは、精神と物質という二元論的世界に生きて

いるわけじゃない。

メルロ＝ポンティは、この二元論を超える“身体性”を手に、哲学を出奔する。右手で左手をつかむ。どっちを感じる側で、どっちが感じられる側なのか。色覚に障害がある時、1色1色を脱色するのではない。色全体の差異が崩れてゆくのである。

二元論ではなく、境界なき表裏であり、最限ないからみであり、なにより生まの存在である。

● 『現代思想の冒険者たち01 ジンメル 生の形式』北川東子 講談社

彼は、1858年に生まれ、1919年に没している。

まず、この時代に驚いてしまう。はっきり言って100年前の人ですよ。しかし、この思想、全く古くありません。むしろ、その当時ではなく、現代の僕らがどう考えればいいかを示唆してくれます。

19世紀から20世紀への移行のなかで、世界はその相貌を大きく変えた。そのものが意味をもつ時代から相対的な時代へと。その変化の立役者は「貨幣」である。

ジンメルは『「貨幣」の哲学』で、貨幣の意味をみつめる。

貨幣には顔がない。しかも無性格である。これらが意味することはあらゆるものの価値と等価になれるということだ。この等価性を媒介にして、ものどもの相対化が生まれた。

このことは、3つのことを意味している。一つは、そのものの価値の絶対性という神話が終ったということ。2つ目は、全てのものが、本来の価値ではなく、貨幣的な意味、つまり値段という価値大系の一部となってしまったこと。最後に、貨幣が、そのものが持っている将来的有効性を価値とみなした為、そのものの価値を「可能性」として表現することとなった。そして、このことは、全ての価値が単なる「可能性」にすぎないことを僕らに教えることとなった。

世界は、可能性という虚構なのだ。

近代の思想では、人間は実体であった。何かを考える実体、行動する主体、それらとしての人間像があった。ものの価値の相対化の時代に人間も決して例外ではいられない。

人間も、様々な関係性の中で出現するなにかであるしかない。

もう一点ジンメル思想でおもしろかったのは、その世界認識の方法である。彼は、社会関係（人間関係も含めて）は感覚的相互関係と認識的相互関係との2面で成り立つとする。注目すべきは、前者の感覚的相互関係で、彼は特に重視する。

人は、他者を知る前に感知している。他者を見て、声を聞き、他者を匂っている。

あらゆる社会関係は、システムや機能だけではなく、感情や感覚のネットワークの中で成立していると説く。

しかも、それは個別で、様々な感覚のバランスによって支えられている不安定な世界なのだ。

ここは、全く違う感覚を持っている。ということは、全く違う基盤において営まれている社会を、それぞれが持っているということである。

共通する世界観の神話は終わった。

それぞれが、不安定で、違う世界を抱えているのだ。しかも「自分の世界」というよりも「僕の不安定な世界」と「あなたの不安定な世界」の関係性で浮かびあがってくる陽炎の様なものなのだ。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

（藤原敏行 古今集）